法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-22

幻のワロニー : 文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開(2)

鈴木, 智之 / スズキ, トモユキ / SUZUKI, Tomoyuki

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
51
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
48
(終了ページ / End Page)
75
(発行年 / Year)
2005-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015333

幻のワロニー

文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開（2）

鈴　木　智　之

第1章　企図の形成

1　制度としての雑誌，企図としての雑誌

文学雑誌『ワロニー』の形成と展開の過程を，その多層的な文脈との関連の中で記述していくこと。これが以下に継続される論考の課題である。しかしその際に私たちは，「文学雑誌 revue littéraire」というものをどのような視点から対象化し，いかにしてこれを歴史的文脈につなげていくことができるだろうか。具体的な論述に入る前に，若干の概念的な整理を加え，記述のための基本的視角を設定しておくことにしよう。

ここでは，二つの視点から文学雑誌を対象化してみることにしたい。ひとつは，文学場を構成する制度的な装置として雑誌をとらえる視点。もうひとつは，政治・社会的な「問い」に応えて言説空間の中に新たな可能性を模索する企てとしてこれをとらえる視点である。

（1）　制度としての雑誌

まずは，P. ブルデューや J. デュボアの提示した「場の理論」や「制度論」の考え方を前提に置いて，その特異な空間の中で個別の「実践」を可能にし，「場」を構造化する装置として雑誌を位置づけてみよう。

この時，「文学実践の場」においてそれがいかなる機能を果たしているのかという観点から，「文学雑誌」について以下のような五つの側面を見いだすことができる。

①　場の構造化の焦点としての雑誌

文学生産の場が自律性をもって存立するためには，少なくとも，一定の規模を超える形で複数の文学実践の主体が存在しなければならない。この時，産出される作

品とその担い手が，それぞれに個性的な，したがってまったく異質な性格を示すとすれば，この多数の主体が形成する空間は，限りなく複雑で混沌とした様相を示すに違いない。したがって逆に，「場」が一定の構造を備えているとすれば，それは，作家や作品を分類し，たがいに関連づけることを可能にするような指標（複雑性を縮減するための手がかり）が存在するからである。実際に，その指標はさまざまな形で与えられている。例えば，作家の年齢（世代）や性別，出身階層や政治的イデオロギーといった「文学外」の基準もこれに貢献するし，それ以上に，作品の示す美的な傾向やその前提となる美学上の立場が重要な意味をもつ。そして，こうした分類の基準はしばしば，場の中での文学主体相互の関係――例えば師弟関係や交友関係――や，これを支える制度的な基盤――例えば組織への所属や作品をだしている出版社――を通じてより可視的なものとなっていく。

雑誌もまた，これらの制度的機構と並んで，文学場の中に比較的安定した社会関係の枠組みを提示している。それゆえに，この作家はどの雑誌に書いているとか，この作品はあの雑誌に発表されたものだというような情報が，その作家の選択する立場，作品の示す傾向を推し測る上で重要な手がかりとなる。場に参与している主体（作家，編集者など）にとっても，外部からこれを記述しようとする主体（例えば研究者）にとっても，雑誌は関係の網の目を支える定常的な結節点，すなわち場の構造化の焦点として利用することができる。

② 生産と正統化の審級としての雑誌

雑誌が社会空間の構造化の指標として機能するということは，視点を変えれば，それが何らかの選別の役割を果たしているということでもある。ほとんどすべての場合に，文学雑誌は，投稿された原稿を無条件に掲載しているわけではなく，質的な水準や傾向的な適合性を測る何らかの基準にしたがってふるいわけている。J. デュボアはこの点に着目して，雑誌を文学場における「生産と正統化の審級」のひとつに数えている。「審級」という言葉によって意味されるのは，「作品の構成と定義と正統化にかんして固有の機能を果たす制度的な機構」であり，したがってすべての審級は「権力と権力のための闘争の場」と見なすことができる（Dubois 1985 : 82)。この意味において，雑誌は，エコールやサロンや出版社などと並んで，「何をいかに書くべきか」という規準を与え，「その基準を満たしているか否か」に判断を下し，その結果として，テクストに「作品」としての承認を与え，その書き手とともに正統性を付与する役割を果たす。

③　戦略拠点としての雑誌

上にあげた二つの機能――指標化と正統化――と表裏をなす形で，雑誌は個々の（個人的および集合的な）主体が文学場の中に台頭していく上での「戦略拠点」という性格を帯びる。一定の権威と傾向を備えたさまざまな既存の雑誌の中からどれを選んで自分の作品を発表していくのか，逆に，新たにどのような雑誌を作って自分たちの文学的な立場を主張していくのか。いずれの場合にも雑誌は，その集団的で制度的な性格ゆえに，一人ひとりの文学実践を社会空間の中でより有効に提示することを可能にする。とりわけ，前衛的な性格をもった新しい文学的な試みがみずからの存在を認めさせようとする際に，雑誌は取得されるべき「位置」を場の中に創出し，そこに「仲間 alliés」を募りながら，「敵対者 ennemis」を明確化していく役割を果たす。F. トュメレルの用語を借りれば，雑誌はその運動の「戦略的ツール outil stratégique」（Thumérel 2002）となるのである。

④　遭遇の場としての雑誌

雑誌はほとんどの場合に集団的な営為という性格をもつ。そして，集合的実践としての雑誌は，何らかの程度において，その内部に一貫性と統合性をもとめる。いずれの雑誌にも（明示的であれ暗黙のうちにであれ，厳格にであれ緩やかにであれ）選択された文学的・美的理念があり，これに基づいて集団の内部に規範を設定し選別を行う主体（例えば，編集委員会）が存在する。そして多くの場合，この「方向づけ」の作業は，ひとりないしは少数の主導的な人物によって担われることになる。

しかし，特定の指導者による統制の試みは，常に限定的な形でしか実現されえない。「文学」という制度がその基本的な性格において「個人」の営みを前提とするものであるがゆえに，雑誌もまた個々の主体によるそれぞれに異質な企てを寄せ集める形でしか成立しない。いいかえれば，雑誌は集合的な運動の母体であると同時に，一人ひとりの文学主体がその個別の戦略の中で利用する足場でもある。集団的な運動体によって共有される「立場」や「主義」は，個別利害の一時的な一致や妥協の上にしか成立しない。多くの雑誌が短い期間しか存続しえず，再編成をくりかえしていくひとつの理由がここにある。

それは，視点を変えれば，雑誌がたがいに性格を異にする文学者たちの「遭遇と交換の場 lieux de rencontre et d'échange」（Dubois 1985 : 91）であるということを意味する。個々の書き手は，それぞれに異なった「性向」をもち，それぞれに異なった「軌跡」の中で，自己の「文学的戦略」を構築していく。個別の主体が孤

立した空間の中で展開する傾向の強いこの「文学」という実践が交わり，たがいの異質性と同質性のやりとりの中で作用を及ぼしあうことを可能にするような「社交の場」として雑誌は存在する。

集団としての統制の必要性と，その構成要素の個別性と自立性。この二つの性格は，ひとつの雑誌の内部に絶えざる緊張をもたらす。雑誌という対象の分析は，これを「単一の集合的主体」としてとらえる視点と，内部に葛藤をはらんだ「複合的な構成体」としてとらえる視点とを，同時に備えなければならない。

⑤　境界設定の装置としての雑誌

文学雑誌は，その寄稿者の資格を限定したり，実質的にその読者を一定の範囲に想定したりすることによって，文学空間の内部に一定の分節化を行う。例えば，明示的な規定によって「投稿者」を「特定の地域在住者」に限るとか，特定の執筆言語を指示することによって実質的な寄稿者の範囲を限定するということは，そこに何らかの広がりをもった「文学圏」の存在を描きだすことにつながる。雑誌のタイトルをはじめとするパラテクストも，同様の機能を果たすことであろう（例えば，『新フランス評論』とか『若きベルギー』とか『新日本文学』といったタイトルは，それだけでナショナルな広がりをもった文学圏の存在を想定させる。同様に『新沖縄文学』や『ワロニー』は地域的な文学圏の構想に寄与する）。これによって雑誌は文学の場の中に「境界」を設定し，そこにみずからの「領土」を主張する。先に見た「正統化の審級」としての機能はこの「境界設定」の機能との不可分の結びつきの上に遂行されるものである[1)]。

こうした五つの機能のうちいずれの側面が前面に押しだされてくるのかは，個々の雑誌ごとに，それが置かれている文脈ごとに，またそれぞれの雑誌がたどった歴史的な段階ごとに異なってくる。例えば，ガリマール社から刊行され，J. ポーランに率いられた『新フランス評論』のような「権威ある」媒体の場合には，「選別」と「正統化」の機能が重要な意味をもつ。これに対して，文学的成功を夢見るいまだ無名の詩人たちが費用をもちよって刊行するような雑誌であれば，「戦略拠点」としての性格が打ちだされてくることだろう。しかしいずれにしても，雑誌が担う複数の機能は相互依存的・相互規定的に連関しあうものであり，それぞれが異なるバランスの中でそのすべてを充足していくものと考えることができる。したがって，雑誌分析のひとつの焦点は，その機能的な性格のバランスがいかなる要因との関連

の中で決まってくるのかに置かれるだろう。その要因としては，所与の歴史的時点での場の状況，その場に占める雑誌の位置，雑誌の担い手（寄稿者，編集者）の保有する象徴的・物質的資源，その担い手集団の社会学的性格などが考えられる。それぞれの条件にしたがって，個々の雑誌は充足すべき機能をそれぞれに異なる配分で実現していくのである。

（2） 企図としての雑誌

こうした「制度論」的な視点からなる概念化は，文学雑誌の社会的な性格を，やはり限定的にしかとらえることができない。私たちは他方で，雑誌がより広範な歴史的な文脈の中で，社会的な含意をともなった言説を産出し何らかの表象を提示するための媒体となっていることにも目を向けておかねばならない。

この時，「雑誌」総体の運動を「文学的企図」として位置づけることが，ひとつの可能な概念化の方法となるだろう。

「企図」という概念は，P. マシュレーが『文学生産の理論』（Macherey 1966）において提示した考え方を，ゆるやかに受け継ごうとするところに選択されるものである。この著作においてマシュレーは，文学生産を一種のイデオロギー的企図 projet idéologique としてとらえる視点を提起していた。それによれば，文学的虚構の産出（テクストの生産）をうながすものは，その言表主体が置かれた歴史・社会的現実に生じる諸々の矛盾である。「文学的創造」は，その問題をはらんだ「現実的諸条件」に「想像的な表象」を与えようとするイデオロギー的な言説生産の企てとして位置づけられる。バルザックの『農民』や J. ヴェルヌの『神秘の島』といった作品をとりあげて，マシュレーは，現実的矛盾の「否認」の上に生起する文学言説が，現実味のある表象を構成しようとする中でその「矛盾」をテクスト中に呼びこみ，当初の企図の修正または放棄へといたる過程を暴きだしていく。すなわち，現実的な諸矛盾に端を発した文学的企図は，それゆえに言説の内部に緊張を呼びおこし，矛盾を（別様に）反復することになるのである。この矛盾―企図―矛盾の連鎖関係の中でテクストの生成過程を再構成することが，マシュレーにとっての「批評」の役割であった。

マシュレーが批評的読解の基礎に置いたこの考え方は，対象ごとに大幅な修正的適用を要求するものの，今もなお大きな有効性を示している。方法論としての最も大きなメリットは，文学表象を外在的な現実の単なる反映や記述としてとらえるのではなく，言説生産の力動的な連鎖の中にこれを位置づけ，表象中に生じる矛盾や

断絶の析出の中から，これを条件づけた状況へと遡行することを可能にするという点にある。「歴史的な現実」は，文学表象がこれを写し取る対象ではなく，言説生産の実践を惹き起こす原因の位置に置かれる。つまり社会的な実践をとりまく現実の問題が，文学言説や虚構の表象を産出する行為をうながし，その表象の内部に「問題」を（別様に）再生産させるのである。こうした，矛盾の再生産過程の中に「文学」を含めた「言説」生産の実践を位置づけるという方法を，私たちも本稿の目的に即して採用することができるだろう。

もちろん私たちは，1960年代のマシュレーのように，マルクス主義の歴史観を土台として，言説生産の条件を経済システムと階級的諸関係の発展に由来する社会的矛盾に還元しようとするものではない。のちにも見るように「階級」という要因は局面状況に応じてなお有効な解釈枠組みを提示するものの，すべての問題がア・プリオリにこれと関連づけられるわけではない。私たちとしては，多元的な諸力，あるいは複数の審級の絡み合いの中から「矛盾」が引き起こされるのだと考え，それぞれの対象ごとに文学生産の動因となるファクターを模索していかざるをえない。

その上で，「文学雑誌」という対象についても，マシュレーの示した記述の戦略を応用することが可能であるように思われる。既述のように「雑誌」は，個別の文学主体の「遭遇」の場としてみれば，多様な文学的志向の寄せ集め，個人的な戦略の交錯の場でしかない。しかし，同時に「雑誌」は，何らかの程度において，共通の「規準」を形成し，「何を」「いかに」書くべきであるのかを，その寄稿者に共有させるような組織化の力を発揮するものである。この集合的な側面に視点をおいて見れば，雑誌の総体をひとつの「企図」として記述することが可能になる。

さてこの時，P. ブルデュー（Bourdieu 1992）が論じたように，文学的行為は与えられた「場の構造」の中で既存の位置を奪い合うばかりでなく，そこに形成されつつある「可能性の空間」を読みとり，時には未知なる立場を構築しようとする一面をもつ。この「創出的」「革新的」な実践の展開は，「新しいもの」に特権的な価値づけをほどこす「近代的」な文学・芸術の論理に即したものである。ブルデューはこの点に強調を置いて，「新しいもの」を構築する企てを，固有の「文学的正統性」の獲得を賭けた制度的闘争の所産と見なし，これを場に内在的な運動として記述する。しかし，いかなる「可能性の空間」がそこに開かれ，個別の主体がどのような実践を構築するのかは，「文学場」の論理だけからは十分に読み解けない場合が多い。それは，文学実践が，場に外在する諸問題に触発されその矛盾を乗り越えるための解を模索する「企て」という性格を，同時に備えているからである。いか

なる「新しいもの」が追求されるのかは，政治・社会的な問題設定と文学制度の論理との交錯によって決定される。あるいは，歴史的に生起した言説生産の企図が特定の形態をまとうための媒介装置として「文学制度」が働きかける。いずれにしても，文学言説は，M. ビロンのいう「二重の意味請求」(Biron 1994)，すなわち時に相矛盾する二層の文脈からの要求に応えようとするのである。

雑誌という集合的な実践についても同様の考え方を適用することができる。文学雑誌は常に，文学生産の場に内在的なアクターとして，制度の論理に強く規定される一面をもつ。しかしそれは同時に，社会的な問題に触発された「言説」生産の機関としての側面をもちあわせる。この二面的な性格を念頭に置いて，雑誌の成立と展開の過程をひとつの集合的な「企図」として把握し，いかなる現実的な緊張の中からそれが生まれ，いかなる矛盾をその内部に呼びこんでいくのかを検討していかなければならない。

2 『ワロニー』(1886–1992)

こうした二重の視点から，『ワロニー』という雑誌の読解へと進んでいく。ここではまず，この雑誌がいかなる主体によって担われ，どのような形で刊行されていたのか，その概略を確認しておこう。

『ワロニー』は1886年，アルベール・モッケルを中心とするリエージュ大学の学生たちの手によって刊行され，1892年まで7年間継続された文学雑誌である。しかし，それは何もないところにいきなり創刊されたのではなく，その前身には『エラン *Élan*』および『エラン・リテレール *Élan littéraire*』と題された学生サークルの機関誌が存在していた。

この雑誌の発行母体となったのは，モッケルが，1884年12月に，ブリュージュ出身の学生シャルル・ヴァン・ハルメ Charles Van Halmé とともに結成した小さな学生サークル「エラン」であった。この学生サークルはやがて，自分たちの活動報告書『エラン』を作成・刊行し（1885年2月〜），ここに評論的な文章と並んで，文学的な作品を掲載していくようになる。一年後，『エラン・リテレール』と改称。この年の5月号（第4号）までこの誌名で刊行が続く。しかし1886年の春から，アルベール・モッケルとその友人たちは，雑誌を発展的に解消し，リエージュ大学の枠を超えた「地域 région」の雑誌を刊行することを企画し始める。これ

が1886年6月『ワロニー』として具体化するのである。

『ワロニー』は，原則として月刊。1892年に廃刊されるまでに，計57冊が刊行されている[2)]。

『ワロニー』：年度ごとの刊行数

1886年	6号
1887年	11号＋別冊
1888年	11号
1889年	10号
1890年	8号
1891年	7号
1892年	4号
計	57号 （＋別冊1号）

刊行費用は，売り上げによって補われる分以外は，主としてモッケル（実質的にはその家族）の私費に負っていたと考えられる[3)]。その点において『ワロニー』は，同時代の他の多くの文学雑誌と同様，市場での収益性に依存しない私的な雑誌，日本語でいう「同人誌」の域を超えるものではなかった。

創刊時の編集委員会（Comité de rédaction）は，アルベール・モッケルとギュスターヴ・ラーレンベック Gustave Rahlenbeck，モーリス・シヴィル Maurice Siville によって構成されていた。しかし，1886年第6号からラーレンベックが退き，エルネスト・マエム Ernest Mahaim がこれに代わる。1887年第9号からはピエール・M・オーリン Pierre M. Olin が加わり，1889年第6号からマエムが退く。さらに，1890年度からシヴィルの名前が消え，同年の第5号からパリ支部を担う者としてアンリ・ド・レニエが加わっている。

構成内容としては，詩・散文による作品の発表を主とし，これにしばしば評論が加わり，そして毎号巻末に「文学時評」「芸術時評」「書評」「小時評」などの各種の「時評」のコーナーが設けられている。これらの「時評」は，署名つきで起草されている場合と，無署名で書かれている場合とがあるが，他の諸潮流に対する「判断」を示し，他の諸雑誌との関係を明らかにするなど，総じて「場」の内部におけるみずからの位置を自覚的に模索し，表明する場所となっている。

先に提示した「文学雑誌」の機能的な諸側面に照らしてみた場合，文学を志す学生たちが自費出版という形で刊行したこの雑誌が，「文学場に台頭していくための戦略拠点」という性格を色濃く示すことはいうまでもない。実際，のちに見るよう

に，モッケルらはこの雑誌を単なる作品発表の場として準備するだけでなく，これを「拠点」として文学界からの認知を得，「場」の中に一定の地位を獲得していくためのさまざまな戦略を展開していく。私たちが明らかにしなければならないのは，その戦略的実践を方向づける「場」の構造や論理であり，さらにはその展開と，雑誌の刊行を動機づけた「企図」との連続性および不連続性である。

ところで，戦略的な自己呈示の場として雑誌を組織していくためには，他方で，そこに何らかの個性的な性格を与え，これを他の主体や媒体との関連の中で「示差的」に位置づけていかねばならない。したがって『ワロニー』も，作品や評論を通じて，次第に明確化されていく美学を語り，「何をいかに書くべきか」の指針を提示するようになる。これによって雑誌は，「場」の構造化の焦点としての役割を果たし，他方で「生産の審級」としての機能を充たしていくことにもなる。さらにこの雑誌の場合には，選択されていく美学とタイトルに掲げられた地域名称との結びつきによって，ゆるやかな境界画定の機能（すなわち，地域の文学の創出媒体としての役割）をも果たしていく。

また，『ワロニー』においては，雑誌全体の「方向づけ」において，A. モッケルという明確な主導者が存在し，編集の上でも美学理論の構築の上でも強いリーダーシップを発揮している。とはいえ，それはすべての寄稿者がモッケルの理論と方針に忠実であったことを意味するわけではないし，モッケルもまた教条的に自己の美学を押しつけるような編集方針をとったわけではない。したがって，集団の中には，少なからぬ多様性があり，局面に応じてそれは葛藤や軋轢として顕在化していくことになる。私たちが着目すべき「地域主義的企図」の行方は，この拡散的な傾向の中で読みとられざるをえない。

3　企図の形成

では，その刊行の当初において『ワロニー』はいかなる理念を掲げ，何を目的としていたのだろうか。

前述のように，「雑誌」という現象をひとつの言説生産の「企図 projet」としてとらえるとすれば，まずはその実践がいかなる「プログラム」にしたがって構想され，推進されていったのかを確認しておかねばならない。実践の総体を導くプログラムは，最終的にはその実践全体の観察の中で明らかにされるものであるが，それ以前にもこれをうかがい知るための手がかりは準備されている。というのも，文学

雑誌の多くは，その編集と刊行を方向づける理念を，何らかの形で定式化し，表明しているからである。その理念は，ゆるやかな統一性を示すに過ぎない場合もあれば，厳密な美学的な立場を示すこともある。いずれにしてもそれは，しばしば，「編集方針」や「綱領」などの形で明示され，投稿者や読者にその雑誌の傾向や目標を明らかにする。

そこでここでは，雑誌の成立にいたる過程をより詳細にあとづけながら，その創刊の時点で構想されていたプログラムの所在を明らかにしていくことにしよう。

（1）『エラン・リテレール』から『ワロニー』へ

既述のように，『ワロニー』の前身となったのは，アルベール・モッケルがシャルル・ヴァン・ハルメらとともに結成した学生サークル「エラン」の機関誌『エラン・リテレール』であった。この「エラン」というグループの成立の経緯については，アメリカの研究者アンドリュー・ジャクソン・マチューズの著作『ワロニー 1886-1892 ベルギーにおけるサンボリスト運動』（Mathews 1947）が最も豊かな情報を与えてくれる。モッケルへの直接の取材をもとにしたこの著作の中で，マチューズはサークル「エラン」の結成にいたるまでの状況を次のように記している。

1884年秋，リエージュ大学の数多くの学生組織の中にあって，最も重要な存在は「レ・トラント（30人会）」と「レ・トレーズ（13人会）」であった。この二つのクラブの目的は，ともに弁論術（art of speaking）を鍛えることにあった。「レ・トラント」は経済学，社会学，政治学に関心をむけ，そのメンバーの中には将来ソルヴェイ・アンスティテュの学長となるエルネスト・マエムや，リエージュの市長となるサヴィエ・ニュージャンがいた。一方の「レ・トレーズ」はむしろ歴史や科学や文学的テーマに向いており，エクトール・シェネーをそのメンバーに擁していた。しかし，この年の秋，リエージュ大学にはこれらのいずれのサークルにも属さず，どちらにつくべきか決めかねている，ひとりの有望な若き学生があった。それが，いまだ18歳にもみたない，快活で独立心旺盛な若者，アルベール・モッケルであった。

実際のところ，二つのサークルはいずれも彼にはしっくりとくるものではなかった。彼はすでに詩を書き始めており，もっぱら文学にかんするサークルを作れるような，自分と同様の関心をもった学生たちとのつきあいを求めていた。そして，少なくとも彼は一人の友人を頼みにすることができた。シャルル・ヴァン・ハルメ。彼とともに，モッケルは散歩をしたり，田舎へサイクリングに行ったり，早朝ムーズ川で泳いだりしていた。ヴァン・ハルメはブリュージュの出身で，数年前，勉学のためにリエージュにやってきたのだった。

ブリュージュですでに，彼はある種の文学サークルに属していたことがあった。そこで，このヴァン・ハルメとともに，アルベール・モッケルは，当初はわずか5〜6人の少人数の学生グループを集め，文学サークル「エラン」を結成した。これが1884年12月のことである。(Mathews 1947 : 25)

マチューズによれば，「エラン」の活動内容は，毎週1回サン・ランベール広場のカフェに集まり，メンバーの誰かの話を聞き，議論を戦わせることにあった。そして，結成から1ヵ月後，モッケルはメンバーに，自分たちの活動の報告書bulletinを刊行することを提案する。1885年1月，16ページからなる準備号が，そして実質的な創刊号（『エラン』）が翌月に刊行される。各月に発行されたこの報告書は，翌86年に『エラン・リテレール』と改題されて，さらに4号が出版されることになる。

1885年（『エラン』），1886年（『エラン・リテレール』）それぞれの総目次をもとに，掲載された作品の著者名とタイトルを一覧することにしよう。

『エラン』総目次　1885年

著者名（アルファベット順）	タイトル
G. Balsamo	La fleur（花）
	La souffrance（苦悩）
F. B.	Idylle（田園恋愛詩）
H. Chainaye	Lydia（リディア）
	Premier amour（初恋）
G. Deconinck	Victor Hugo（ヴィクトール・ユゴー）
De La Fère	Sérénade（セレナーデ）
Ed. Destexhe	Danton（ダントン）
Diavolo	Ed. About（エド・アバウト）
	Denise（ドゥニーズ）
	Le mouvement flamand（フラマン運動）
Gustave D.	En correctionnelle（軽罪裁判所にて）
Ch. Edouard	Croquis maritimes（海の素描）
	Soir d'automne（秋の夕べ）
	Tristia（トリスティア）
R. Ellum	Souvenir（想い出）
Fritz Ell	Sur la glace（氷上）
	Barcarolle（バルカロール）
	Viens（ウィーン）
	Le Rouet（糸車）
	Marquise Pompadour（ポンパドール侯爵夫人）
	Chanson d'Autrefois（いにしえの歌）
	Prends garde（気をつけて）

著者名（アルファベット順）	タイトル
Léon Gheur	Les tremblements de terre（地震）
Armand Hanotieau	Hiver（冬）
L. Hemma	Profils universitaires（大学生たちの肖像）
	Plein été（盛夏）
	Impressions d'un sage grec（ギリシャの賢人の印象）
	En villégiature（保養地にて）
Hernan	Sonnets（ソネット）
	Dalila（ダリラ）
Aug. Jottrand	Paysages（風景）
De Khermantini	Coquetterie（コケットリー）
	Le Lac（湖）
Alexandre Macedonski	Le Vaisseau fantôme（幽霊船）
	La Valse des églatines（ノバラのワルツ）
Ch. Mettange	Désillusion（幻滅）
M. M.	Lutte（闘い）
	Ballade（バラード）
	Boutade（機知）
Albert Mockel	Si tu voulais（お望みであれば）
	Ma voisine（隣の女）
	L'hiver mondain（世俗の冬）
	J'aime la Danse（ダンスが好き）
	Grisaille（灰色の光景）
	Funérailles（葬送）
	Amour platonique（プラトニックな愛）
	Ronsard（ロンサール）
	Nerveux!（神経質！）
Léon Morel	L'amour chez les classiques et les romantiques（古典主義者とロマン主義者における愛）
Nestor	Sujet historique（歴史的主題）
Abdel Raman	Hallucination（幻覚）
A. Ramis	Sonnet entomologique（昆虫のソネット）
	Paradoxe（パラドクス）
G. Rapière	Une vie d'étudiant （fragment）（学生生活（断章））
	Ein Fest Commers（祝宴）[4]
F. Rheb	Régates（レガッタ）
T. Réville	Mimi（ミミ）
	Jouons à la raquette（ラケットで遊ぼう）
A. Thos	Pour un mot（一言でいえば）
	Premier avril（四月初め）
	La souffrance est un plaisir（苦しみは喜び）
	Rire forcé（作り笑い）
Tocagno	Oubli（忘却）
Ch. Van Halmé	Morale empirique（経験的道徳学）
	Codification des lois civiles françaises（フランス市民法の法典化）
	Le danger d'être trop belle（美しすぎることの危険）
	Comment on rend les hommes vertueux（いかにして人々の徳を高めるか）
Gaston Vyttall	Le Suicide（自殺）
	Nouvelle（知らせ）
XXX	De l'art（芸術論）

『エラン・リテレール』総目次　1886年

著者名（アルファベット順）	タイトル
A. M.	Chronique musicale（音楽時評）
	Georges Rodenbach à l'Émulation（エミュラシオン会館のジョルジュ・ローデンバッハ）
	La jeune belgique au théâtre（演劇における若きベルギー）
B. B.	Chronique musicale（音楽時評）
Hector Chainaye	Nuit nerveuse（心たかぶる夜）
Diavolo	L'étudiant pauvre（貧乏学生）
Fritz Ell.	Bluette（閃光）
	Arabesque（アラベスク）
	Croquis musicaux（音楽的素描）
	Du Mozart（モーツアルト論）
	Du Moskowsky（モスコフスキー論）
	Du Chopin（ショパン論）
R. Ellum	Le Prisonnier du Caucase（コーカサスの囚われ人）
F. S.	Chronique littéraire（文学時評）
G. Girran	Si tu savais（分ってくれていたら）
	Le temps des Chèvrefeuilles（スイカズラの季節）
G. R.	Chronique littéraire（文学時評）
G. V.	Chronique littéraire（文学時評）
L. Hemma	Le salon des XX（レ・ヴァン（20人会）のサロン）
	Chronique musicale（音楽時評）
A. Julin	Agonie lente（ゆるやかな最期）
L. H.	Le Roitelet （キクイタダキ）
	Lakmé（ラクメ）
	Mlle Weber（マドモワゼル・ウェーバー）
W. A. Macédonski	Conte oriental（東洋風物語）
Albert Mockel	Chronique littéraire（文学時評）
	Conte blanc（けがれなき物語）
	Happe-Chair（強欲）
	Les Voix（声）
A. Moran	L'Essor（飛躍）
Léon Morel	L'amour chez les classiques et chez les romantiques（古典主義者およびロマン主義者における愛）
Morico	Déclaration rentrée（抑えこまれた宣言）
M. S.	Chronique littéraire（文学時評）
Pierre-M. Olin	Bernal Diaz del Castillo, conquistador（ベルナル・ディアス・デル・カスティーリョ，コンキスタドール）
Gustave Rahlenbeck	Jules Dereul（ジュール・ドゥルール）
S.	L'œuvre（作品）
Fernand Severin	Poème barbare（野蛮な歌）
	Sicut Deus（シクート・デウス）
	In excelsis（イン・エクセルシス）
	Genest（エニシダ）
	Renoncement（断念）
	Nuit de mai（五月の夜）
	Dans les bruyères（ヒースの茂みの中に）
Maurice Siville	Amour défunt（過ぎ去りし恋）

著者名（アルファベット順）	タイトル
	Glissez, mortels（すべりゆけ，人間ども）
	Epousailles（婚礼）
	???
Aug. Vierset	Pantoum（パントゥーム）
Y. Z.	Chronique musicale（音楽時評）

＊リエージュ市立図書館所蔵『エラン』，『エラン・リテレール』巻末目次より，鈴木作成。
作品の日本語タイトルは，内容を吟味した上のものではなく，表題の言葉から推測の上付記したもの。

ここにあげたタイトルからも推し測れるように，掲載された作品の中心は「文学作品」（詩，散文，評論）と芸術評にある。「文学作品」の内容は多様であるが，学生生活に取材したと推測されるもの（「大学生の肖像」「学生生活（断章）」など），ロマン主義的なモチーフを連想させるもの（「苦悩」「田園恋愛詩」「いにしえの歌」「灰色の風景」など）が多い。他方，初年度（1885年）にかんしては，必ずしも「文学・芸術」に限定されず，政治的な評論，社会科学的な論文もこれに加わっている。例えば，サークルの中心メンバーの一人であったヴァン・ハルメは「経験的道徳学」，「フランス市民法の法典化」といった文章を寄せている。マチューズの論述からは，サークル「エラン」はもっぱら文学を論じるために組織されたように受け取れるが，その機関誌『エラン』を見るかぎり，少なくともその当初から厳密な枠づけがあったようには思われない。

しかし二年目になると明らかに雑誌の内容は特化されていく。タイトルの変更（『エラン』から『エラン・リテレール』へ）とともに，もっぱら「文学・芸術」に専心するグループという性格がはっきりと打ちだされている。いいかえれば，社会問題や政治問題（当時のリエージュにおいて噴出し始めていた労働問題や，サークルのメンバーによって提起されていた「言語問題」）を直接に論じるような言説は，雑誌の射程外に排除されていく。これが，『ワロニー』への変身へと直接につながる傾向であることはのちに見るとおりである。

また，すでに『エラン・リテレール』の時点で，「作品」と「文学時評」「音楽時評」などの「時評」から各巻を構成するという構成形式がとられている。この点にも『ワロニー』との連続性を確認することができる。

さらに，以下の表からもうかがえるように，『エラン』から『エラン・リテレール』へと展開していく中で，寄稿者が少しずつ入れ替わり，数においては限定されてゆく傾向が見られる。そして，その二年目のメンバーの大半が『ワロニー』のオリジナル・グループの核を構成していることがわかる（具体的には，H. シェネー，F. エル，A. マセドンスキー，A. モッケル，G. ラーレンベック，F. セヴリン，M.

シヴィル，G. ガルニール，P. M. オーリン，A. ヴィエルセ)。この点からも，『エラン・リテレール』から『ワロニー』への転換は断絶的なものではなく，段階的な変化の延長線上にあったと見ることができる。『ワロニー』の創刊は，『エラン・リテレール』において確実に準備されていたのである。

『エラン』,『エラン・リテレール』寄稿者の推移

『エラン』(1885年) 寄稿者	○
『エラン・リテレール』(1886年) 寄稿者	△
このうち『ワロニー』寄稿者	□

著　者　名	Elan	Elan. litt.	Wallonie
B. (F.)	○		
H. Chainaye	○	△	□
G. Deconinck (=G. Balsamo, XXX)	○		
Ed. Destexhe	○		
Ed. Dumont (=Diavolo, Abdel Raman, De Khermantini)	○	△	
Gustave. D.	○		
F. Lutens (=Fritz. Ell)	○	△	□
Léon Gheur (=A. Thos, De La Fère)	○		
Armand Hanotieau	○		
Aug. Jottrand (=Gaston Vyttall, M. M.)	○		□
A. Julin (=Léon Morel)	○	△	
A. Lameere (=A. Ramis)	○		
Alexandre Macedonski	○	△	□
Ch. Magnette (=Ch. Mettange)	○		
Albert Mockel (=L. Hemma)	○	△	□
Georges Muller (=R. Ellum)	○	△	
Nestor	○		
G. Rahlenbeck (=G. Rapière)	○	△	□
F. Rheb	○		
Ch. De Schryver (=Ch. Edouard)	○		
F. Séverin (=Hernan)	○	△	□
M. Siville (=Morico)	○	△	□
Tocagno	○		
Ch. Van Halmé (=T. Réville)	○		
G. Garnir (=G. Girran)		△	□
G. V.		△	
A. Moran		△	
P. -M. Olin		△	□
S.		△	
A. Vierset		△	□
Y. Z.		△	

このように，執筆メンバーの変化と限定をともないながら，『エラン・リテレー

ル』は，政治的および社会科学的な主題を排除し，「文学」と「芸術」の雑誌という性格を強めていく。では，その『エラン・リテレール』を『ワロニー』へと転換させる契機はどこにあったのだろうか。再びマチューズによれば，そこには外部からの働きかけがあったされる。その転換をうながしたのは，ブリュッセル自由大学の学生で，すでに『バゾッシュ』という雑誌（サンボリスム的な傾向の強い文学雑誌）を主宰していたシャルル・ド・トンブール Charles de Tombeur である。再びマチューズの記述をそのまま引用しよう。

（……）1886年の春，モッケルとシェネーと『バゾッシュ』の編集者であったシャルル・ド・トンブールは，『エラン』のプログラムを拡張し，おそらくはタイトルを変更し，地域主義的な雑誌を作るというアイディアについて議論していた。「リエージュの運動」はすでにその地域的な限定を超え，ワロン地方全体へと広がるだけの射程をもっていたのである。(Mathews 1947 : 31)

リエージュ大学の一サークルの雑誌は，すでに一大学の枠組みを超えて，他の都市・他の大学からも関心を寄せられるようになっていた。そうした状況の中でトンブールが，『エラン・リテレール』を「ワロン」の文学雑誌へと拡張することを提案し，これに応えてモッケルが雑誌の改称に踏み切った。『ワロニー』が誕生する少なくともひとつのきっかけがそこにあったように思われる。そのトンブールは，1886年3月に刊行された『バゾッシュ』において，『エラン・リテレール』に対して次のような呼びかけをしている。

「『エラン・リテレール』のリエージュの仲間たち，そっちでは本当に何かが湧きだそうとしているのかい？　だとすれば，どんどん行ったほうがいい。タイトルを変えて，もっとはっきりとした，響きのいい，ワロン的な名前を掲げたらいい。この国のフェリーブル（プロヴァンス詩人）となって，我らのオイル語の地に歌う若々しい蝉の声だけを聞かせてほしい。ワロニーよ永遠なれ」(Kunel 1966 : 34)

トンブールの言葉が，そのままモッケルたちの考え方を代表しているのではないとしても，少なくともそこには，「地域主義的」な発想が語られているし，『ワロニー』の創刊の時点で，ある程度までフランスのプロヴァンスの文学運動――「フェリブリージュ」[5] ――が意識されていたことはまちがいない。

したがって，すでにこれまでの経緯から，二つの大きな「方向性」が浮かびあがってくる。ひとつは，新しく生まれるべき雑誌が「政治・社会的な評論」を排した「文学・芸術の専門誌」という性格をもつこと，そしてもうひとつは，リエージュを拠点としながら，その雑誌にワロン地方全体の媒体という広がりを与えることである。そして，1886年5月，アルベール・モッケル，ギュスターヴ・ラーレンベック，モーリス・シヴィルの三者を編集委員会として，その新しい雑誌『ワロニー』がスタートすることになる。

（2）「フラマン運動」への意識

この時，このタイトルに示される「地域的な同一性」の強調は，それ自体のうちに社会的な主張を含みながら，その一方での「政治・社会的論説の排除」という傾向と共謀的な関係にたっているように見える。この点にかんして興味深いのは，『エラン』に「フラマン運動」を――しかもきわめて好意的な視点から――紹介した論文が掲載されているという事実である。ディアヴォロなる筆名（Ed. デュモンのペンネーム）によって，三号にわたって連載されたこの評論は，雑誌が進もうとしていた方向性に，二重の意味で抵触するテクストである。簡単にその内容をふりかえっておこう。

ディアヴォロはまず，ワロンの人々が「フランドルの言語運動」の内実をまったく理解することのないまま，「この国を荒廃させようとするもの」だと非難している点を指摘する。ディアヴォロによれば，「フラマン運動」はベルギー全土での二言語使用，国家全体における二言語の完全な平等を要求するものではない。

> フラマン運動を指導する人々は，彼らの言語がすべてのベルギー人に課せられることを要求しているのではなく，フラマン人が，その生活のすべての領域で，自分たちの母語，オランダ語を使用することができるようになることを求めているのである。それは，ワロン人が自由に自分たちの言語，フランス語を使えるのと同じことである。(p. 46)

「民衆が自分たちの問題をその民族言語によって扱うことができる。これほど正当な，これほど自然なことがあるだろうか」とディアヴォロは問う。この「民族（ネーション）」と「言語」との不可分の結びつきを前提に，ディアヴォロは「運動」の正当性を主張していく。

さらに彼は，いくつかの言語法の制定によりオランダ語の使用が行政と司法の領

域で認められているにもかかわらず，これが実質的に実現されていない点をとりあげ，その背景に「教育制度」の問題を指摘する。オランダ語の教育時間が圧倒的に少なすぎる，というのである。そして最後に，フランス語が社会的昇進（プロモーション）の言語となっているがゆえに，多くのフラマンが教育のフラマン語化を望んでいない事実を問題視し，これに対する憤慨の意を示して論は閉じられる。

この評論の存在が興味深いのは，まず，『ワロニー』グループの周辺に「フラマン運動」に対してかなり好意的な態度をもった学生があり，少なくともそうした学生を通じてフラマン運動の何たるかが十分に認識されていたことを示している点にある。そして，やや穿った見方をすれば，『エラン』から『エラン・リテレール』へ，さらには『ワロニー』へと転じていく中で，こうしたディアヴォロのような論説は確実に遠ざけられていくということでもある[6]。モッケルらは，雑誌の内容を芸術と文学に特化し，政治的な主題を回避しながら，確実に「ワロン」としての利害に与する立場を選んでいる。その意味で，『ワロニー』への展開もまた，社会言語的状況へのひとつの応答として位置づけることができるのである。

では，こうした動きの中で，『ワロニー』はいかなる理念を掲げてスタートしたのだろうか。

（3）プログラムの表明

雑誌の刊行に際しては，この媒体が何を（内容），何故（目的），いかに（方法）実現しようとしているのかが自覚的に検討され，これが何らかの形で表明されることが多い。最も明示的な場合には，それは「宣言 manifesto」や「綱領 programme」という形で読者の前にさしだされる。また，それほど明確な提示がなされない場合でも，「編集後記」「ノート」「評論」「対談」などを通じて，雑誌はみずからの方向づけを明らかにするのが一般的である。したがって，文学雑誌という「企図」の内実を見るためにはまず，その主要な担い手たちがどのような方針や指針を打ちだしていたのかを確認しておかねばならない。

『ワロニー』においては，「宣言（マニフェスト）」という言葉にふさわしいほどの鮮明な（美学的立場を明確にした）意思表明はなされていない。しかしそれは，刊行の時点での理念の不在やその表現の欠如を意味するものではない。この雑誌を主導した若き詩人たちの中には，その方針を示す概念が緩やかな形で共有され，それはいくつかのテクストを通じて――時には周辺的なテクスト para-texte の中で――表出されている。

ここでは，『エラン・リテレール』の最終号（1886年5月）に掲げられた「告知Avis」――誌名の変更を告げる言葉――をとりあげ，これをもとに創刊当時の編集委員会の構想を確認していくことにする。

［原文］

LA WALLONIE

REVUE MENSUELLE DE LITTÉRATURE ET D'ART

COMITÉ DE RÉDACTION

Albert MOCKEL, Gustave RAHLENBECK, Maurice SIVILLE

Bureau : 8 rue St-Adalbert

AVIS

A la suite d'un changement de direction, *l'Éan Littéraire* paraîtra dorénavant sous le titre : **La Wallonie**, revue mensuelle de littérature et d'art. **La Wallonie** ne sera pas une publication anti-flamande, mais elle s'efforcera de grouper autour d'elle les éléments vivants de la jeunesse littéraire des provinces wallonnes. **La Wallonie** adopte un programme *artistique* franchement progressiste; elle exclut la politique de ses colonnes et reste indépendante de toute école.

［訳］

ワロニー

文学と芸術にかんする月刊誌

編集委員会

アルベール・モッケル，ギュスターヴ・ラーレンベック，モーリス・シヴィル

編集局：サン・タダルベール通り8番

告知

執行部の交代にともなって，『エラン・リテレール』は以後『ワロニー　文学と芸術にかんする月刊誌』というタイトルのもとに刊行される。『ワロニー』は反フラマンの刊行物ではない。しかし，それはワロン諸地方の若き文学者たちの生き生きとした力を結集することを目指すことになろう。『ワロニー』は明確に進歩的な芸術的なプログラムを採用する。それは，その記事から政治を追放し，一切のエコールから独立なものにとどまる。

モッケル，ラーレンベック，シヴィルの三者によって起草されたこの簡潔な文章には，この時点での雑誌の編集方針がきわめて明確な形で表明されている。そこにはすでに，三つの概念を見いだすことができる。まず第一に，『ワロニー』は政治的な記事を排除し，もっぱら「文学」と「芸術」に奉仕する雑誌であるということ。第二に，『ワロニー』はその文学と芸術にかんして「進歩的なプログラム」を採用するということ。そして第三に，この雑誌は「ワロン諸地方 provinces wallonnes」の文学者たちを結集することを目的とした「地域 région」の文学誌であるということ。そして，この三面的な自己規定は，雑誌の刊行される文脈の中で，みずからの占めようとする位置を明晰に見通したところから発せられているように思われる。この「告知」にこめられた意図を，刊行にいたるまでの経緯と，これをとりまく環境の中に位置づけながら確認しておくことにしよう。

第一の概念はまず，『ワロニー』が，その前身となる媒体に対して，主題的な領域をより限定的に規定しようとしていることを示している。既述のように，一学生サークルの機関誌であった『エラン』および『エラン・リテレール』は，文学作品の発表を主としながらも，政治的な主張や社会問題への評論なども掲載される雑多な「報告書」であった。これに対して，『ワロニー』は「文学」と「芸術」のための雑誌という定義を明確にし，政治的な主張を掲載しないことを宣言している。それは，モッケルたちが「芸術のための芸術」という考え方に近いところで文学や芸術の「社会的有用性」という基準を排除し，その価値の固有性，それゆえの絶対性を追求しようとしているということでもある。その意味において，『ワロニー』は，

文学の理念的な自律化にコミットしようとしている。しかし，文学・芸術の「自律性」「絶対性」を口実としたこの限定的な姿勢を，雑誌の刊行された歴史的な文脈——階級的な対立関係の顕在化の時期——に位置づけてみるならば，そこには「状況」に対するひとつの「態度選択」が示されている，と見ることができる。多少なりとも豊かな家庭の子息であり，その大半がブルジョアの出自をもつ学生たちは，「芸術」の名の下に，その出身階級から批判的な距離をとり，しかしこれに敵対する勢力の側にも加担しない場所を選びとっているように思われるのである[7]。

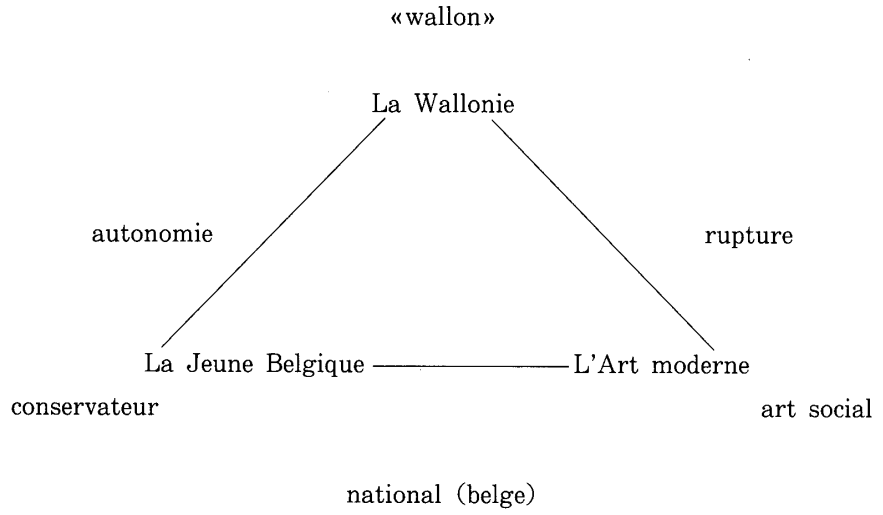
「進歩的」という二つ目の形容詞も，この文脈でひとつの意味を帯びている。この言葉によって，彼らは「ブルジョア的な保守性」に批判的なスタンスを示し，反抗し革新する「前衛」の位置にみずからを置こうとしている。その意味で『ワロニー』は，「政治的な前衛」と直接に結びつこうとしていたE. ピカールの「社会芸術」の側に一歩近づいている。しかし，『ワロニー』のもつ「進歩性」「前衛性」は，その精神（モラル）において社会主義的な異議申し立てに親和的であるとしても，基本的には文学制度の内部において切断を呼び起こそうとするものに他ならない。それは，政治的な現実の中で追求される革新と同形のものを，象徴的な領域で，平行的に実現しようとする。文学場に内在的な論理にしたがって，絶えざる革新のゲームが遂行されていくことが「モデルニテ」の条件であるとすれば，『ワロニー』は自覚的にモダンの文学を志向する媒体であったということができる。

これに対して，第三に，この「告知」は雑誌の「地域的」性格を強調している。それは一面において，リエージュ大学のサークル誌であった『エラン・リテレール』から，より開かれたより公共的な性格をもつ雑誌へと変容しようとする意志の表明でもある。この時，モッケルらが「ワロニー」という新造語を雑誌の表題に採用にしているのはひとつの興味深い事実である。すでに述べたようにこの言葉は，19世紀の文献学者たちのあいだではすでにベルギーのロマンス語系諸地域を総称するものとして用いられていたものの，まだ広く人々に認知された用語ではなかった。この時点では，「ワロニー」と呼ばれるべき単一の集合体はごく曖昧な形で人々の意識の中に存在したにすぎない。それは，ベルギーという統一国家の中で，「フラマン」という他者が姿を見せる時にはじめて浮上してくる，新しいアイデンティティの枠組みであった。おそらくは，そうであればこそ，その「新しさ nouveauté」において，「進歩的」であることを目指す若者たちの掲げうる言葉となりえたのである。いずれにしてもここには，「地域的なアイデンティティ」の形成にむけた「提起」がなされている。この時「告知」は，わざわざ「反フラマン」の雑誌では

ないと断ることによって，その前提に「反フラマン」という文脈があることを曲言法的に告白している。また他方では，「ワロン諸地方 provinces wallonnes」という複数形を用いることによって，「ワロニー」の名の下に示される空間がまだ自明の「同一性」を有していないことを語っている。この雑誌の刊行時点において，「ワロニー」とは既存の実体ではなく，むしろ「構築」されなければならない「企図」に他ならなかったのである。

（4） ベルギーの文学場と『ワロニー』の位置

ここに提示された三つの概念は，雑誌の主導者たちが，「自律的」なものとして形作られつつあったベルギーの文学場の中に，みずからの位置を自覚的な形で設定しようとしていたことを示している。私たちは少なくとも，この三つの概念をそのまま用いて，『ワロニー』を『若きベルギー』や『近代芸術』との関係の中に位置づけることができる。



『ワロニー』は文学と芸術の「自律性」を擁護し，その価値を政治的な文脈から独立したものとして確立しようとする。この点において，「芸術のための芸術」を掲げた『若きベルギー』とともに，「社会芸術」を要求する『近代芸術』に対立する。ここに各誌の位置を規定する第一の分類軸（「自律性—社会芸術」）を見いだすことができる。他方で『ワロニー』は「伝統的な形式」からの切断を追求し，「新たなもの」の創造を求めるという「前衛的」ないし「進歩的」な思想において，「形式の確立と遵守」を主張するパルナス派の美学からは距離を置くことになる。この点で『ワロニー』はむしろ『近代芸術』に近い立場をとり，『若きベルギー』の対極に立つ。分類の第二の軸は「伝統—切断」または「保守的—進歩的」の対抗

関係の上に求めることができる。

これに対して第三の軸は，その地域性において『ワロニー』を『若きベルギー』と『近代芸術』の両者に対立させることになる。しかし，その第三軸がいささか多義的なものとならざるをえない。ひとつの含意は，『若きベルギー』と『近代芸術』が「ベルギー・ナショナル」の文学を体現しようとしているのに対し，『ワロニー』は「ベルギー文学」という枠組みを拒否し，地域――したがって，ひとまずは国家よりも限定された集合体――に固有のものを追求しようとしている，ということになる。このレヴェルでは，第三軸は「地域性―国民性」という形で表記できる。しかし，のちに確認されるように，『ワロニー』が示した「反・ベルギー文学」の旗印は，「地域性（地域的な限定性）」という言葉ではくくれない内容を示す。というのも，『ワロニー』は「ベルギー文学ではなくフランス文学」，あるいはさらに「一国の国民文学」を超えた「普遍的な文学性」を追求するのだという主張を同時に押しだしていくからである。この後者の含意を強調すれば，第三の軸は「フランス文学―ベルギー文学（フラマン文学）」，さらに「普遍文学―国民文学」の対抗関係として表記することができる。しかもその二つの対抗軸の背後には，「ブリュッセル」中心の文学運動に対して「リエージュ」の独自性を主張しようとする「都市」間のライバル関係が基調音として流れている。すなわち，「ワロニー」という地域名称の提示は，対照関係において多様な対立項を想定させるのである。

「ワロニー」という呼称の提起する対照関係の多重性		
ワロニー	⟺	フランス（パリ） フランドル ベルギー（ナショナルなもの）
（リエージュ）		（ブリュッセル）

この三番目の軸の「ぶれ」あるいは「多義性」こそが，私たちの考察の中心に置かれるべきものである。そして，すでに前章において述べたように，この曖昧さを読み解いていくためには，二つの視点が必要になるように思われる。

ひとつには，『ワロニー』という「企図」が，ベルギー文学とフランス文学（またはパリを「首都」とする国際文学空間）への二重の帰属関係に置かれていること。ここで試みられているベルギーの文学場の中での「位置の取得」は，フランス文学の場における「承認」の獲得を条件としてはじめて正統性をもちうる。「ゲームの規則」は常に二重化され，国内的な対抗関係に対する意識とパリの文学的審級に対する意識とがもつれた形で働きかけることによって，言説の中にさまざまなぶれを

生じさせる。したがって，彼らが示した「文学的同一性」の構成過程を，ベルギーあるいはワロンの制度的周辺性・二重性に結びつけながら読みとっていくことが求められる。

そして他方では，文学的アイデンティティの獲得のためのゲームが，「ワロン運動」に継承されるような社会的言説空間に強く連動しているということ。ある位相においては（プロヴァンスの文学と同様に）「地域の芸術・文学」を志向する運動が，そのまま「国民文学」の創出の流れを超え，より上位の「普遍性」を主張し始める。しかしその際に，その「優越性」の拠りどころとして「フランス文学」との同一性が語られる。この奇妙といえば奇妙な論理展開が『ワロニー』の中には随所に見いだされるのであるが，その言説のひずみは，「ワロン」の固有性とその卓越性を語ろうとする「政治的・社会的」言説の総体に通底する性格を備えている。両者の結びつきの中から，文学的企図とその社会的条件との関連性を読みとっていくことがもうひとつの課題となる。

4　企図の多義性，文脈の多元性

本稿の主題に即して，いくつかの要点を再確認しておこう。

まず第一に，『ワロニー』は，『エラン』からの発展的展開の中で，社会科学的論説や政治的評論を排除し，「文学」と「芸術」へとみずからを特化する形で成立してきたこと。この側面においては，社会言説としての性格を包み隠し，政治的な状況に関与しないものとしてふるまっている。

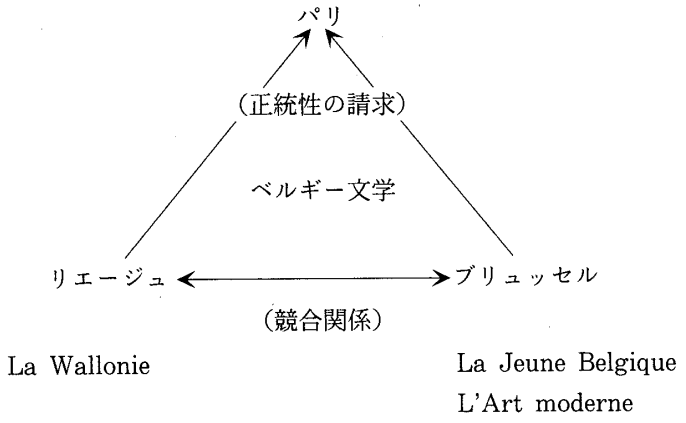
しかし，これと同時に『ワロニー』は，構築されるべき「地域」の名称をタイトルに冠し，それだけですでにみずからの拠って立つ政治・社会的な文脈を指示するものとなっている。「地域の芸術・文学」を擁護するというプログラムは，一方では「ベルギーのナショナルな統一性」を語る言説との対抗関係において，他方では「フラマン」の「民族的正統性」を主張する運動との対抗関係において，「我々＝ワロン」の文化的正統性を確認し，その「同一性」を明らかにしようとする意志を含みこむものである。

さて，こうした二面性をともなって成立した『ワロニー』は，その創刊の時点においてすでに，ベルギーの文学場の構造を明確に意識し，先行する他の雑誌との関連において取得されるべき位置を模索している。刊行にあたって表明されたプログラムは，『若きベルギー』と『近代芸術』という二つの先行主体に対する第三極の

形成という課題を明らかにするものであり，その点においても，「新しい可能性」の創出によって「場」の内部へと「台頭」するための「戦略拠点」という性格を強く示している。

この戦略的な自己規定において，「ワロニー」という地域名称の選択は，先行する二誌に対する差別化の指標として機能する側面をもつ。それぞれに異なるイデオロギーを掲げながらも，ともにブリュッセルを拠点として，ベルギー・ナショナルの文学を志向する『若きベルギー』と『近代芸術』に対して，「ワロン」の雑誌であることを明示するということは，この二誌が競合の中で作りあげようとしていた「場」の境界設定に対して異議申し立てをするということでもある。ただしそれは，単純に「ナショナル」なものに対して「レジョナル」なものを選択するという意味をもつわけではない。他方において，ベルギーの内部でのこの競合は，フランスの文学的審級とのかかわりにおいて，どちらがより高い威信を獲得しうるのかを賭け金としている。ナショナルなものにせよ，レジョナルなものにせよ，ローカルなしるしづけを余儀なくされる「文学」が，「世界文学の首都」(Casanova) からの承認を介して「普遍的」な射程を請求するための争い。リエージュとブリュッセルとのライヴァル関係は，常にパリとの三角関係の中で理解されなければならない。この関係を単純化すれば，次のような図を描くことができるだろう。

ベルギーのフランス（語）文学の場



このように，「ワロンの芸術・文学」の構築をめざすというこの雑誌のひとつの目標は，いくつかの点において両義的な文脈の中に位置づけて見なければならない。まずは，「文学・芸術」の「社会的世界」に対する断絶と連続。第二に，「ベルギーの文学場」の「フランス文学」に対する自律と従属。第三に，ベルギーの中でのブリュッセルとリエージュのライヴァル関係。そして最後に，ベルギー・ネーションの統一性を志向する言説と二つの民族の異質性と独立性を語る言説とのせめぎあい。

ベルギーにおける「雑誌」相互の競合関係は，こうしたいくつもの要因が「場」の論理に媒介された形で具現化されたものとして理解することができる。

いずれにしても，この競合の場に新たに参入していった『ワロニー』は，わずか七年のあいだに，一大学サークルの機関誌から国際的な名声をともなった文学雑誌へと成長し，先行する二誌に対抗しうる第三の地位を獲得するにいたる。その見事な「台頭」がいかにして可能となっていったのか。次章では，「サンボリスム」への接近に力点をおいて，『ワロニー』の戦略的展開の過程をあとづけていくことにしよう。

注

1) 当初筆者は，雑誌の制度的機能を，①～④の四点に整理することができると考えていた。これに対して，雑誌の「境界設定機能」の重要性を指摘してくれたのは加藤宏である。(加藤宏 2004 を参照)

2) 筆者が参照したテクストは，リエージュ大学中央図書館所蔵のものである。ただし，リエージュ大学図書館では，第 4 年度（1889 年）分が欠本となっていたため，これについてはリエージュ市立図書館所蔵のものにあたっている。

1887 年度の「別冊」は，『芸術のためのエクリ』との合併を告げるものであるが，これが文字通り「別冊」として刊行されたのか，それとも 6 月号に付属して刊行されたのかは，現存の保存版からは判別できない。ここでは仮に「別冊」と表記する。

3) 雑誌の刊行経費の内訳について，詳細を示す資料が存在するわけではない。ただし，マチューズはモッケルからの聞き取りをもとに，『エラン・リテレール』から『ワロニー』にいたる改編の過程でモッケルが財政的な責任を負うにいたった経緯を次のように示している。「文学グループは，出費ばかりがかさみ『収入の減りつづける』雑誌の負担から逃れられることを喜んだ。アルベール・モッケルが完全に責任を担うと申しでると，移行はすみやかに行われた。そこには，グループに対する支払いはまったくともなわなかったが，それでもなお高額な基本金が必要であった。モッケルは，雑誌の所有にともなってその未払いの負債を引き受けねばならなかったのである」(Mathews 1947 : 31)

4) Ein Fest Commers は，Ein Fest Kommers の誤記であるように思われる。あるいは何らかの修辞的理由で，故意に Commers としているのかもしれない。

5) フェリブリージュ Félibrige は，19 世紀半ばのプロヴァンスにおいて生まれた文学流派であり，プロヴァンス語と諸方言の維持と純化，さらには南フランス Midi の文化の独自性を保った文学の再生 renaissance を目的に掲げるものであった。その出発点は，1851 年に求められる。この年，マルセイユにおいて，ジョゼフ・ルーマニルが作品集

『リ・プルヴァンサロ li Prouvençalo』を編集（ここにミストラルとオーバネルが寄稿）。1853年，ゴーがオクシタンの詩人会議を組織。そして1854年，アヴィニヨンに近いフォン・セグーニュ城に7人の若き詩人（オーバネル，ブリュネ，マチュー，ミストラル，ルーマニル，タヴァン，ジエラ）が結集。ミストラルが，みずからの呼び名として「フェリーブル félibres」を提唱。1855年，「7人のフェリーブル」は『アルマナ・プルヴァンソオ Armana Prouvençau』を刊行。これが運動のプロパガンダと作品発表の器官となる。彼らの活動に触発されて，各地方（カタルーニア，ラングドック，アキテーヌなど）で地方言語・文学の保護・確立の動きが広がっていく（*Grand dictionnaire encyclopédique Larousse*, 1983, Larousse (Paris) 参照）。

6) シャルリエ（Charlier 1985）は，この点について，E. デュモン（ディアヴォロ）はグループから排除されたのだと論じている。しかし，デュモンがどのような経緯で『エラン・リテレール』から離れていったのか，その過程の詳細は明らかにされていない。

7) 例えば，すでに『ワロニー』時代から社会主義運動に傾倒し，やがて労働党の議員ともなるC.ダンブロンのような存在とは対照的に，モッケルは常に労働者の運動からは距離をとっていた。J.パックはモッケルのダンブロンへの書簡を引きながら，その態度について次のように述べる。「パターナリスティックな工場経営者の息子，自分の製鉄会社の労働者たちのあいだに協働システムを導入したリエージュ郊外の産業指導者の息子であったモッケルは，民衆からの要求に敬意を示しながらも，芸術と民主主義とをそれぞれの領域にとどめたまま，政治参加することができないし，そうしようともしない。彼はダンブロンに言っている。『社会主義万歳，確かに。人間的な現実――芸術は決してそうではないけれど――。それはまた知的関心を向けるに値する現実のひとつでもある。けれども，この課題に対する僕の考えははっきりしすぎているかもしれないけれど，やっぱり僕は君のように自分自身の一部をそこに捧げることはできそうにない』（1939年8月30日）」（Paque 2003 : 154）。この後年の書簡に示された「留保」が，すでに『ワロニー』の時代において，モッケルの労働問題に対する態度を性格づけている。

〈参考文献〉

Élan, Élan littéraire は，リエージュ市立図書館所蔵のものを参照。*Élan* からの引用は，Saltkine Reprints (1971, Genève) 社の復刻版にもとづく。

その他の文献にかんしては，本章において特に言及したもののみを示す。

Biron, Michel 1994 *La Modernité belge, littérature et société*, Éditions Labor (Bruxelles), P. U de Montréal (Montréal).

Bourdieu, Pierre 1992 *Les Règles de l'art, Genèse et structure du champ littéraire*, Éditions du Seuil (Paris)（石井洋二郎訳『芸術の規則Ⅰ・Ⅱ』，藤原書店，1995–96

年).

Casanova, Pascale 1999 *La République mondiale des lettres*, Seuil (Paris). (岩切正一郎訳,『世界文学空間 文学資本と文学革命』, 藤原書店, 2002年).

Charlier, Joséphine 1985 *Albert Mockel, sa vie, son oeuvre* (mémoire de licence en philologie romane, Université de Liège, Faculté de Philosophie et de Lettres).

Dubois, Jacques 1985 *L'Institution de la littérature*, Éditions Labor (Bruxelles).

加藤宏 2004「〈沖縄文学〉場の研究 (1)——『新沖縄文学』を手がかりとする制度論的アプローチ——」,『明治学院大学社会学部付属研究所年報』, 34号, 明治学院大学社会学部付属研究所.

Kunel, Manuel 1966 «Albert Mockel et Célestin Demblon», *Marginales*, No. 110-111, Hervé Renard (Bruxelles).

Macherey, Pierre 1966 *Pour une théorie de la production littéraire*, Maspero (Paris).

Mathews, Andrew Jackson 1947 *La Wallonie, 1886-1892, The Symbolist Movement in Belgium*, King's Crown Press (New York).

Paque, Jeannine 2003 «Albert Mockel fonde *La Wallonie*, entre Liège et Paris» dans Bertrand, Biron, Denis, Grutman (éds.) *Histoire de la littérature belge, 1830-2000*, Fayard (Paris).

Thumérel, Fabrice 2002 *Le Champ littéraire français au XXe siècle, Éléments pour une sociologie de la littérature*, Armand Colin (Paris).